広尾学園中学校高等学校
（現 順心女子学園）

帰国生には最高の環境と条件（6）

国際担当　小山 和智

2007 年4月、順心女子学園は共学校になって、校名も「広尾学園」に変わります。しかし、この学園の帰国生に対する受け入れ体制や個別指導の素晴らしさが男子にも開放されるわけで、ますます目が離せない学校となります。

● 新生「広尾学園」が離陸を開始！

７月２日（日）の日能研学校フェア（日吉・目白）を皮切りに、各学習塾の会場説明会がスタートしました。2007 年４月から共学校となる「広尾学園」のブースには相談者の列ができ、順調に“離陸”を開始できたようです。

学園では、本年度から特進コースを設け、教務の面でも様々な改革を行なっています。前々号で、朝一テスト・個別課題学習の様子をご紹介しましたが、授業では、中高とも先取り学習を行ない、高校２年の終了時点で高校の内容を終え、３年次には専ら受験対策を行なうよう６ヶ年・３ヶ年の指導計画を立てて授業を進めています。

また、こうした授業改革と同時に、年間の行事予定も大幅な改定を行いました。いくつかの例をあげますと、高校の修学旅行の実施時期を２年生の６月から１年生の春休みへ移したこと、各学期の中間試験を廃止したこと、期末試験後に１～３週間の授業日を設けたことなどです。これらの改革によって、授業日数も大幅に増加し、昨年度比で年間２６日程度の増加となっています。生徒たちは、こうした落ち着いた生活環境の中で、日々学習に励んでいます。

共学校に変わります
順心女子学園から、広尾学園へ

●「ゴール逆算型学習」こそ指導の柱

前号で、広尾学園が何を目指している学校かはご理解いただけたことと思います。学園の規模は小さくても「広尾学園の卒業生は、問題解決能力が高い」という評価をしていただけるように、教師も日々精進しています。

生徒には「大人（２５～３０歳）になった時、どういう自分になっていたいか」を考えさせます。当然、どんな職業・立場であれ、自分なりの人生を自力で歩んでいるイメージなのですが、とりあえずの目標設定を行わせます。そして、そのゴールに至るためには今、何をすべきかを意識化すること、学ぶべき内容にメリハリをつけるよう指導します。

例えば「医師になりたい」という生徒は当然、生物や化学に興味を湧かせますし、人間の心理にまで配慮できることの大切さを考えるようになります。教師はそれに対して、具体的な学習プログラムを提供していくわけです。

目標自体は数年後に変わっても構わないのですが、当面の目標の定まらない生徒は学習面でも無駄が多く、知識の定着度も高くありません。したがって「職業観」あるいは「人生設計の感覚」を育むため、学園では中学１年生から、社会の第一線で活躍する方を講師に招いたり職場を訪ねさせたりして、できるだけ多く接する機会を設けるようにしています。

● ジョブシャドウの“ニューヨーク遠征”

「ジョブシャドウ」は職業観を育む実技演習で、高校生１～２人が１組になって企業の社員に数時間、シャドウ（影）の如くついて回わるものです。社員が仕事をする姿を通して会議の熱気や緊張感を感じ、一部の仕事も手伝いながら仕事の厳しさを肌身で体験するのですが、学園では職業観教育に活用しています。

今年の２月初旬に、ジョブシャドウ本部の特別企画で“ニューヨーク遠征”が実施され、学園からも代表を１名派遣し